

志賀重昂『日本風景論』のキマイラの性格とその景観認識

米 地 文 夫*

(1996年6月28日受理)

はじめに

志賀重昂の代表的著書『日本風景論』は一種の怪物である。本書は1894(明治27)年10月、政教社から発行され、10年間に15版を重ね、最近の岩波文庫新版(1995年)に至るまで復刊、復刻の相次いだロングセラーで、日本史教科書に書名が掲げられたこともある。

この『日本風景論』を、十七、八歳のころに読んで深い感銘を受けたという金子薫園(1935)は、「日本風景の萬邦に並びなき所以」を説いた「本書を読んで、誰がこの美しき自然の楽土に生まれた幸運を慶祝せざるものがあらう、この點に於いて本書は一種の愛國文学と言ひうるのである」という。第二次大戦後はその面を評価することは少なくなった。

しかしながら『日本風景論』は、今日、発行後一世紀余を経て、なお読まれ続けている希有なノンフィクションである。この書は、近代日本の名著の一冊とされ(松田1962, 野口1994)、風景に関する古典的文献(勝原1979)であるなどといわれる。しかしながら、この書には旅行記や博物誌のような記録性や実証性があるわけではなく、また哲学的な深い思索に裏付けられた書でもない。地理書にも見え、文学書のようにもであり、登山案内、旅行案内のような部分も多い。けれども、そのいずれとしても中途半端である。

その捉えどころのなさにもかかわらず、繰り返し復刻、復刊され、引用や紹介をされている。その魅力の秘密は、怪物キマイラのような様々な性格の文のツギハギにあると私は考えている。それぞれの読み手が、主として自分の関心領域にかかわる部分に注目し、その意義を評価しているのである。近代アルピニズムの日本への導入の一機縁となったことを評価する山岳関係者や、先駆的景観論とみる景観工学等の論者などがその好例である。

しかし、その全体像の解明は、必ずしも十分にはなされていないし、風景論とはいいいながら、志賀の景観に関する認識そのものについては、解明が十分になされているとはいひ難く、地理学にどう関わったかを論じたものも多くはない。

私は『日本風景論』の記述の核心部にミルンの論文からの剽窃があることを明らかにし(米地1989, 1990)、以後、研究を進めてきた。個々の部分的な問題については別に報告する予定であるが、それに先立ち、『日本風景論』の全体像や、その根底に潜むものについて、大まかなコンテを公にし、ご批判ご教示を仰ぎたい。

なお、『日本風景論』に関する書誌的な検討については、源(1975, Minamoto 1985)の優れた論文において詳細に行われているので省略する。

* 岩手大学教育学部

I キマイラとしての『日本風景論』

1 なぜ『日本風景論』はキマイラか

「『江山洵美是吾郷』と、身世誰れか吾郷の洵美を謂はざる者ある。」

これは『日本風景論』の巻頭の一節である。著者志賀重昂は大概磐溪の詩を若干改変して引用し、《誰もが故郷の山河は美しいと言う》と書き出している。これには、読者に異論はほとんど無いであろう。ところが読み進むうちに、吾郷が日本に置き換わり、日本の江山の洵美の賛美となり、さらに世界に卓絶した美しさである、と飛躍する。

しかし、どのような論理をもって志賀は日本の風景を世界に冠たるものとしたのであろうか。風景論と称するからには風景を論じなければならないはずである。ところが、その議論の部分は意外に少ない。

志賀がこの書において風景論を書きたかったことは確かであろう。しかしながら風景論というべき部分のごく一部にすぎない。では風景「論」以外の部分を何で埋めようとしたのであろうか。それは風景「誌」と風景「術」であった。その風景「誌」は自然地理的な記載に加えて、歌枕や昨今俳枕と呼ばれるものなどの、その土地の風景を詠み込む詩歌の類いを挿入している。風景「術」という言い方は熟していないが風景アプローチ術とでも称すべきものであり、実際には旅行術、登山術などが相当する。

おそらく志賀は地理学、特に自然地理学的な書としては、『日本風景論』の5年前に刊行された『日本地文学』（矢津 1889）を超えるものは書けないことを認識していたと思われ、この『日本地文学』を参照しつつも、志賀らしく詩歌や美文をちりばめ、風景を国粹主義的に捉え、登山という行動の奨めを行う、という様々な、というよりも雑多な視点で書くことによって『日本地文学』とは違う、一般の知識層向けの奇怪なキマイラ（キメラ）的書物を作り上げたのである。

この奇怪さを『日本風景論』の発刊時にすでに看破していた評者がいる。大俗窟主と名乗るこの評者（1895）は「其の結構、其の組成に至りては實に支離滅裂、統一なく、組織なきの感あり、其の推理、其の論決に至りては意義模稜箇々の断定を集めたるものゝみ、箇々の根據なき想像を臚列せるのみ」と酷評する。そしてこういう。

故に此書は其の体裁より論ずれば一種の隨筆なり、或る所は雑駁なる日本地文学、或る所は日本地質論、或る所は粗獷なる美術論、或る所は一種の名所圖繪、或る所は日本名所に關する詩歌俳諧集、或る所は風景に關する短編隨感録これを集めたるものは日本風景論なりこれらのものを秩序なく統系なく、交互錯綜して列記したるものは日本風景論なり

『日本地文学』をベストセラーにしたのは新旧の両要素が混在している点のためという源（1975）の指摘は、ツギハギのキマイラ性が魅力となっていたという私の視点と共通するものがある。

キマイラとはギリシャ神話に出てくる怪物で、獅子の頭、牡山羊の胴、竜の尾を持ち、真ん中に山羊の頭ももち、その口から火を吹く。一匹で三匹の獣の力をもつ怪物である¹⁾。

《獅子の頭》はさしずめミルン論文などから剽窃した科学的装い、《牡山羊の胴体》は古典

的詩歌美文の類い、《竜の尾》はこれまた洋書からの借り物の登山の奨め、そして山羊の口からは国粋主義や清国への敵愾心の《炎》を吐くのである。

日本の風景の優位を説くため、志賀は次の四つのステップを本書の中に仕組んでいる。

- ①まず読者の耳に馴染んだ詩歌や美文《山羊の胴》により伝統的な風景美を人々に思い起こさせる。
- ②ついでそこへ近代的な風景美というべきもの、特に山岳の美を説き《竜の尾》、とりわけ日本に多い火山に頁を割き、人々に自国の風景には新しい時代にも相応しい美しさもあることを知らせる。
- ③そして一見、科学的な記述《獅子の頭》で日本の風景が卓絶していることを裏付けたように見せる。
- ④さらにその優位を敵国清国の位置するアジア大陸東部との比較によって際立たせ、日本が大陸を侵略することの正当性すら主張《口から吐く炎》する。

以上の操作は論理的に繋がっているわけではない。しかし、何となく人々に日本の風景の優位が納得できたような気を起こさせた。この中の②や③では、志賀自身は苦手な登山と科学に関する記載をしなければならないため、外国人の英文の著作に依拠せざるを得なかった。ところが、この書は日本人による日本風景美の発見であるとアピールしなければならないため、結局、外国人原著者名を隠し、剽窃しなければならなかったのである。

《口から炎を吐く山羊》のみが志賀自身による『日本風景論』というべきものであったが、古風な《山羊》の美文のみを用いて《口から炎》すなわち大陸侵略の檄を吐いても、時代遅れの武断派の心情的言辞にすぎない。そこでこれに《竜の尾》である近代的登山の称揚と《獅子の頭》に当たる科学的説明とを付けることによって、奇怪な形ながら迫力のある、そして一見説得力のありそうにみえる怪物『日本風景論』を生み出したのである。

2 《獅子の頭》とは何かー自然地理的記述ー

志賀は国粋主義の論客として知られつつあったが、彼の特色の一つは農学士という当時であった。彼は最高の自然科学的教育を受けたという肩書であった。実はその肩書に反して、その自然科学的素養のうち自然地理学や数学の面の学力は不十分²⁾であったが、彼は英語力を利して在日英米人の書などを翻訳して用い、あたかも彼自身の考えや調査成果のように装って書いた部分が《獅子の頭》である。それはむしろ仮面といってよいが、この部分が地理学にかかわる部分なので地理書とみなされることが多い³⁾のである。

志賀は雑誌『日本人』第二号(1888)の論文「『日本人』の懷包する処の旨義を告白す」で彼の「国粋旨義」⁴⁾における「理学性」の重要性を説いた。もともと、志賀の属した政教社の中心人物の一人杉浦重剛は「理学宗」と呼ばれるほど理学、すなわち科学の重要性を唱えていた。しかし志賀は、なぜ不得手な自然地理学的な記述を中心に書こうとしたのであろうか。それは前述の志賀論説に続いている西村(1888)の所説「『日本人』ニ質ス」に強い影響を受けた為であると私は考えている。

西村は、「我が Nationality を張る」ためには(精神は日本的なものとして保ちつつ)ヨーロッパ種のミルクを以て日本人を育ててゆくべきであると説き、そのミルクとは理学、すなわち Science であるという。志賀は、彼ら自身の編集発行する雑誌『日本人』の第二号に、志賀自身の前述の論説を先に掲げ、次に西村の文を挙げて、その西村論説が志賀自身の「旨義と暗合

するを喜ぶ」と述べている。しかし、この志賀の文は西村の論説に触発されたものであろうこと、すなわち雑誌『日本人』の編集に当たっていた志賀は、西村の論説を読んで啓発され、自身も以前から同じ考えであったという文を大急ぎで作って、同時に発表するようにしたこと、は想像に難くない。

志賀が「暗合」と書いた点は、志賀自身の文としては、そのような理学重視の考えを以前に公けにしたことがないこと、つまり、西村のプライオリティを、編集者の特権を用いて、志賀が割り込んで共有しようとしたことを、実は裏付けているのではないだろうか。

これ以降、志賀は（実は西村の言説であるものを）志賀自身の考えとしたことの具体的提示を行い、「理学的」日本人を作ろうとしたらしい。そのためには、まず「理学的」な「国粹旨義」の拠りどころを、国土の理学的美しさに求めようとし、その帰結が『日本風景論』の執筆となったのである。しかし、その意欲にもかかわらず、志賀は自らの理学面での基礎的力量的の無さを、同書の各所で露呈し、単なる雑な詩華集・美文集に生かじりの科学用語の乱用を加えた奇怪な本を作る結果となったのである。

志賀が『日本人』誌の中心メンバーとなった理由の一つは、おそらく彼の著書『南洋時事』にみられた、現地視察を踏まえての国粹志向の論調が評価されたのであろう。しかし、彼が三宅雪嶺らに伍して『日本人』に論陣を張るには、さきの太平洋地域の現地視察のような、彼独自の体験などに基づく個性的論説を創らねばならなかったと思われる。それには、彼の札幌農学校卒業の農学士というキャリアと肩書をもとに、（彼の学生時代の言動とは反対に）理学的ないし科学的なものの重視を主張せざるを得なかったのである。

3 《山羊の胴》とは何か—詩歌のアンソロジー—

胴を作るもの、すなわち『日本風景論』の主体は、むしろ江戸時代までの日本人の感性から生まれた叙景の詩歌、美文の類いである。志賀自身は無理をして装った自然科学的な理屈（敢えて論理とは書かないが）よりも、この感性によるものの方が好きであった。このことは例えば次の文からもわかる。

あら世話し花見の中へ越の夏 不笠

の句、日本海岸に於ける夏季の来状の全班を蔽ふ。十七字、正に百巻の地文学、萬千の氣象的材料に優る。

この志賀の文の非論理性、非科学性は明白である。文学的にこの句が優れているかどうかは別として、自然現象を述べたのみの句一つで、科学的な記載や論理、それらを導いた多くの基礎的資料などよりも優ると断定的にいうのは、少なくとも科学的ではない。志賀自身が理学が重要と説いていることとは矛盾している。地文学すなわち自然地理学の百巻よりも、どこが勝るのであろうか。その説明は無い。ここには科学を苦手とする志賀の本音が出ている。読者は『日本風景論』の術学的な科学的記述には感心つつも、おそらくその難解さに辟易したであろう。そのような時に俳句一句がそれら科学的記述を超えるという著者自身の本音を聞いて安心するのである。

人文地理学の側からも千田（1988,1992）は、志賀の『日本風景論』には風景の発見はまだ熟していないとし、その漢詩、和歌、名所図会などの引用などの点を指摘して「彼の風景論に

は、近代以前の精神をあちこちに散りばめている」, さらに志賀について「近代以前の風景観を多分に残しながら地理学を唱え」たと評した。

魅力の秘密は、怪物キマイラのような様々な性格の文のツギハギにあると、私の考えを述べた。私のいう《獅子の頭》と《山羊の胴》とに当たるものの二重性が志賀の文学の秘密であると既に指摘していたのは大井(1978)である。大井は風景とは科学的な構造と感覚的な姿態との二重構造を現わす存在であると捉える。そして次のように言う。

志賀は彼の風景論の中で、この風景の二重構造を巧みに利用した。彼は日本風景の優秀性をつとめて科学的に叙述しようとした。おそらく、彼こそは日本人に初めて風景の科学的な見方を教えてくれた人だったろう。しかし、そうすることによって、逆に、私たちの心情的な風景観をむしろ高揚させたのである。いわば、彼の文学は当時の洋才を駆使することによって、和魂を発奮させるという式の屈折したものだった。

私は日本人に初めて風景の科学的見方を教えたのは高島北海であると考えている。それはともかく、大井のいう二重性論は部分的に正しいが、私はさらに『日本風景論』は以下の節に述べるような《竜の尾》と《口から吐く炎》をも合わせた多重性のものであると考えている。

4 《竜の尾》とは何か―登山の奨励―

『日本風景論』は、日本の近代アルピニズム誕生の機縁を与えたものとしても有名である。田口(1995)は次のように述べている。

重昂の『日本風景論』(一八九四年)は、日本人に近代的自然観を伝えた書として有名だが、とくに付録の「登山の気風を興作すべし」の一文は、多くの青年を登山に導いた。(中略) 重昂自身、西洋の地理学を学んだ学者だが、登山家でない彼が登山に注目した理由の一つは、そこに西洋の冒険精神の結晶を見、新興日本の青年の営為に最もふさわしいと感じたからだろう。

この田口の記述の近代的自然観とか西洋の地理学を学んだ学者とかの表現には問題なしとしないが、後段の志賀が登山に西洋の冒険精神の結晶を見、新興日本の青年の営為としてふさわしいものとしたとする指摘は重要である。

読者にとって、この本の目新しさは“山は登るべきもの”であるということの発見であった。遠くから仰ぐもの、あるいは登るにしても信仰の対象として詣でるものであった山々を、単に、純粋に、登るべきもの、として呈示したことである。それは長く山々を畏敬の対象としていた日本人にとって、その伝統と欧米の冒険精神との合体こそがこの本の新しさであった。そのため、《竜の尾》は実は付録であったはずが、このキマイラの最も魅力的な部分となった。

『日本風景論』が名著として生き残った最大の理由は、主に「日本には火山岩の多々なる事」の章、特に付録の「登山の気風を興作すべし」を評価して、山岳関係者が山の名著と讃えてきたからである。それは志賀が自身はほとんど登山の経験がなく、また登山を好んでもいなかったにも拘わらず、日本山岳会の名誉会員に推され、日本山岳会が企画し大修館が刊行した『日本の山岳名著』の復刻に当たり、本書が真っ先に取り上げられ、岩波文庫版『日本風景論』初版1936年版には当時の山岳界の重鎮小島烏水が、新版1995年版には現在の山岳文学の第一人

者近藤伸行が、それぞれ『日本風景論』の解説を書いていることなどからもわかる。

この日本第一の山岳名著のはずの『日本風景論』の北アルプスなどの登山関係の記述部分が在日欧米人による英文のガイドブックに拠っていることを示唆したのは三田(1973)であり、登山術の部分がガルトンの書からの剽窃であることを指摘したのは黒沼(1976, 1991)であった。

黒沼の批判が、近藤の逆鱗に触れたのは、まさに虎の尾ならぬ、この竜(実はキマイラ)の尾を踏んだからである。岩波文庫新版の解説で近藤は、「外国文献の剽窃とよんで、あたかも鬼の首でもとったかのような言説を吐くのは、明治の啓蒙時代に対する認識がないからである」と名指しこそしないが黒沼を逆に批判した。しかし、私(米地 1990)は『日本風景論』の核心ともいべき富士山の美的科学的説明が、ミルンの論文の訳(誤訳というべきであるが)で、しかもそれを志賀自身の考えのように糊塗していたことを示した。したがって、この近藤の言が強弁にすぎないことは明白である。つまり黒沼や三田が《竜の尾》すなわち登山関係の剽窃を指摘したほかに、米地が《獅子の首》つまり科学的記述の剽窃を見いだした。かくして鬼の首ならぬ「キマイラの首」はとられたのである。

5 《口から吐く炎》とは何か—国粹主義、侵略主義の鼓吹—

志賀は《獅子の頭》すなわち科学の名をもって日本の風景に中国など近隣諸国を征圧する根拠を与えたように見せかけた。しかし彼のアジア大陸に対する日本の優位を説き、侵略を示唆し支持する考えの基盤は、漢詩や俳句、短歌などを散りばめた《山羊の胴》についての山羊の首が吐いているのである。志賀にとっては、もちろん英語が一つの武器ではあったが、これは《獅子の頭》であり、所詮は借り物である。

《獅子の頭》つまり科学的な知による日本優位の立証のように見せかけて、実は《山羊の頭》である伝統的な古風な知が、中国蔑視の気炎を吐いていたのである。

例をあげよう。中国の風景を李夢陽の「黄風北来雲氣惡」などを引用し、黄雲惨憺とし、満眸皆な黄色、などと書く。また、有名な洞庭湖や西湖の岸には、マラリヤがあったり、メタンガスが発生したりすると説く。つまり中国の風景を単調で、不衛生で、日本に敵わないとしたのである。その上、山東半島を占領したら、『日本風景論』の材料が増える(つまり半島も日本領となる)ので新山河(つまり新領土の風景)を書き加え改刷重版しよう、泰山を「山東富士」と改名しよう、などと「地名による侵略」(米地 1996)まで提唱している。

水蒸気の多さからくる日本の風景の美しさを「これ大陸に棲息する者の多く享受能はざる所」と書き、火山のほとんど無い中国の風景を「固より火山国たる日本の景象到る処警拔秀俊なるに似ず」などと書く。そして「日本また火山岩国の天職として東洋将来文明の淵源たらざるべからず」とか「日本は亜細亜の先輩国なり、亜細亜人文の開発は、日本人の天職とする所」などとアジアのリーダーたるべしと説く。

ここには、かつて『南洋時事』において欧米列強の植民地支配の野心から日本やアジアを守ろうという考えを述べた志賀とは異なる姿がある。すなわちアジアを低くみて、先輩日本はそれを支配し導く天職を担うべしといい、欧米に代わって日本が植民地支配に乗り出すことの正当な根拠を、日本の風景に見いだした、とするのである。

ただし『南洋時事』執筆直後から、すでに「帝国主義志向」の微徴がみられるとした慧眼の論者もいる。すなわち、前田(1973, 1978)は『南洋時事附録』(『南洋時事』増補三版, 1889年に収録)の中の「臺灣論」の次の文を掲げている。

想ふに我が鎮西の地脈奔りて薩摩に止り、折れて近洋に入り、琉球諸島を経、忽ち臺灣に到りて
崛起したるものなり。眞個に臺灣の地勢は宛然我が版圖中に在り

この中に前田は、その後の志賀の地理学が辿る方向を読み取り、「侵略主義、土地兼併主義の
論拠として、自然環境を援用する志向である。一種の地政学といってもいい。」と指摘する。さ
らに前田は『日本風景論』についてもこう述べている。

重昂一代の名著『日本風景論』にも、日本の景観美に統一的な地理学的解明を加えた格調高い美
文のあいだに、この志向が隠されている。

として「日本には気候、海流の多變多様なる事」という章の、日本は細長い島国であるとい
う志賀の文中の「北の方北極圏を距るゝ纔に十度半」という記述にサハリン全島を日本の版図
にみている志賀を捉えている。

また、前田は『日本風景論』を次のように明確に捉えている。

重昂の『日本風景論』は（中略）民衆の生活感覚や郷土感情としてのパトリオティズムと結びつ
いていた風景美を、自然科学的な座標軸をかりて再編成し、国土的なスケールに拡大してみせた風
景論なのである。その限りで『日本風景論』が民衆のパトリオティズムを巧みに支配し、操作しつ
つ、富国強兵のプログラムの中に組み込んで行った明治国家の戦略と、ある相似形をかたちづく
っていたことはまぎれもない。パトリオティズムの歯止めを持たないからこそ、重昂の『日本風景論』
は侵略主義、膨張主義を鼓舞する書として有効に機能しえたのである。

この前田の所説に私は賛成である。志賀の侵略主義は、一見、『日本風景論』の中の科学的説
明《獅子の首》によって説明するように見せかけていながら、実は日本人の伝統的愛郷心に訴
える《山羊の胴》についた《山羊の首》から吐かれている炎なのである。

II 志賀重昂の『日本風景論』のテーマと内容

1 『日本風景論』の主な自然地理的テーマは何か

『日本風景論』の自然地理的記述は大別すれば四つの大テーマからなり、それぞれ次の各章
をなしている。

「日本には気候、海流の多變多様なる事」：内容はむしろ生物論である。

「日本には水蒸気の多量なる事」：内容は気候論である。

「日本には火山岩の多々なる事」：内容は火山および火山岩論である。

「日本には流水の侵蝕激烈なる事」：内容は地下水、河川、湖、海などの水蝕論である。

これらの部分以外は増補を重ねるうちに次第に分量を増したものの、上記の4章の占める比
重の大きさは圧倒的であった。全体は9章からなるが、上記4章は全体の約8割に当たり、残

り5章⁵⁾を合わせても2割に過ぎない。

中心をなす4章の中で、前の二つのテーマは題からみると気候の話のようであるが、「日本には気候、海流の…」は、内容的には生物が主である。生物は自然科学の苦手な志賀にとっても農学校出身であるから多少はわかり、生物を題材とすることの多い日本の詩歌を引用することができ、かつ、長野県中学校教諭時代に植物学を担当していたこともあって、まず第一に掲げたのであろう。

火山および火山岩論「日本には火山岩の多々なる事」は『日本風景論』の中でも中心的な部分であり、最もよく知られた箇所でもある。この部分のみで『日本風景論』のほぼ半分を占めている。

2 『日本風景論』の主な内容は何か

志賀重昂の『日本風景論』の内容は前節で述べたような章立てになっている。しかし、それぞれの章は実は多様な内容表現からなっている。それは大別すると、次のように四種類の主要内容と二種類の付録的内容とに分けられる。

- 《主要内容》 a 名所案内的内容：山や溪谷などの名の列挙と、それらについての情報
 b 詩歌名文絵画のアンソロジー：風景についての古今の詩歌名文の紹介
 c 広義の自然地理的情報：地質、気候、生物などについての表や地図など
 d 風景論
- 《付録的内容》 e 登山の勧めなどの類の呼びかけ（付録とか寄語としている）
 f 詩歌文章あるいは絵画の題材の紹介

私は『日本風景論』への従来の賛辞のほとんどは実体から眼をそらしたものだだったと考えている。では実体は何であったのであろうか。

志賀重昂の『日本風景論』の従来評価されていた点を挙げ、上記の内容と対照させ、私の眼から見たそれらの実体とを示そう。上段が前者、下段が後者である。

- ① 科学的風景美の発見, c
 → 学術的装いや牽強付会により科学的にみせかけた生硬な文
- ② 伝統的風景美の称揚, a, b, f
 → 江戸時代とあまり変わらない感覚による古風な美文
- ③ 登山の推奨, e
 → ほとんどが実体験にもとづかない借り物の登山案内文
- ④ ナショナリズムの鼓吹, d
 → 風景に政治的メタファーを組み込んだ反清国の檄文

これらについて富士山に関する部分を例にみてみよう。

① 学術的で生硬な借り物の科学的文章

「…理学上富士山の優絶なところは(中略)宛として対数曲線の定則を表はすにあり。」

(この文はミルン論文からの剽窃)

② 江戸感覚による古風な風景美の紹介

「お富士さん霞のころもぬがしゃんせ雪のはだえが見たうござんす。蜀山人」

「蜂腰一片雲 散作千山雨。茶山」(蜂腰はここでは富士山のことを示す)

③ 登山案内文

「富士山 駿河、甲斐に跨る。海拔三、七七八米突

須走より登るには深林の間を騎する二里『馬返し』に到り、更に二里『中食場』に到り休憩す(中略)宿泊には八号目の小屋最可(後略)」

④ 反清国の檄文

「…山東半島にして我皇の版図中に納まらんか、(中略)泰山は期年『山東富士』と変称し、斉しく富士山の名称を冒さしめんことを」

読者はこのキマイラの、《獅子の頭》①の科学的にみえる文章に感心したり、《山羊の胴》②の伝統的感覚の表現に共鳴したり、《竜の尾》③の登山案内に触発されたり、《口から吐く炎》④の好戦的、侵略主義的檄文に熱狂したりするのである。キマイラは一見、好きな部分を拾い読みできる便利な書にみえるが、実は各部分の相乗効果のために、日本の風景に対する自信と他国、特に中国の風景に対する蔑視や野心が増幅される仕掛けになっているのである。

3 『日本風景論』にはどのような付録的内容がついているか

付録的内容の中には、本体の火山岩の部分と匹敵する分量の「登山の気風を興作すべし」がある。この付録「登山の気風を興作すべし」には、のちに剽窃として問題になる登山術の類いも含まれるが、花崗岩の諸山岳の説明が6割も占めている。

このことは、志賀がもともと火山岩のみならず花崗岩なども含めた山岳論を書きたかったのではないか、という推測を導く。教師として信州の山に生徒を連れていった体験(源 1995)から登山の薦めを書きたかったとも考えられる。しかしながら、中国や朝鮮の風景よりも日本のそれが優れていることを主張するため、火山岩に力点が置かれ、花崗岩は付録に廻したのであろう。⁶⁾

また付録的に増補版で付加されたものの中には、「臺灣の風景」がある。日清戦争の勝利によって日本が獲得したこの地の風景について志賀はこう書いている。

「火山岩の磊落峭拔して洋水の怒激浸蝕する処、宛として日本版図の内の地(中略)風景絶美にして、しかも規模は絶大、日本の高士この好資料地を新に獲、発憤せざらんとするも豈に竟に得んや」

日清戦争開戦直後に刊行された『日本風景論』初版の中で扇動した領土拡大の構想が、戦後実現したことによる自負と増長がここにはみられ、それらを詩歌文章絵画等の題材の紹介の形で誇示するのであった。

このように、付録的内容もまた、それを本文から分ける操作や、追加する操作によって、志賀の『日本風景論』にこめられた意図を達成するためのものであった。

III 啓蒙書としての『日本風景論』

1 志賀はだれに呼びかけているか

ではこのキマイラは、何を誰に呼びかけ働きかけようとしたのであろうか。

志賀重昂が『日本風景論』初版の中で、相手を名指した呼びかけ、ないしは提言を行った文を本文に記載された順に揚げると、次のとおりである。

(生物について)

「日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士は、須らく歐米人の其國に在りて看る能わざる所を取り品題となすこと可。」

(火山について)

「風懷の高士、彫刻家、畫師、詞客、文人にして、自然の大活力を認識し、卓落雄抜の心血を寄托せんと欲せば、主として火山若しくは熄火山に登臨するに在り、」

「君請ふ登臨し、火口湖の晶明なる冽水に嗽ぎて、太古の雪を噛み、天風に獨嘯して、長空に向ひ浩歌せんか、君や人間の物にあらず。」

「(立山火山脈) 豪興の士は此の寔區に入らずんば寄傲し得ず。」

「君や(中略) 請ふ廬を火口湖畔に結べ」

「学校教員たる者、学生生徒の間に登山の氣風を大に興作することに力めざるべからず、其の学生生徒に作文の品題を課する、多く登山の記事を以てせんことを要す。」

「君や請ふ北海道の山中に入らん哉。」

(その他)

「諸君子一たび北海道に遊ばんことを要す。」

「日本の地学家に寄語す(中略) 今後の為す有るべきは實に亜細亞大陸地質圖の大成に在り。」

「日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士は、是に到りて一新改觀、先人に超越するの大作傑品を創作せずして可ならんや。」

このように、君、諸君子、豪興の士など、当時の知識階級の青年に呼びかけるものと、「風懷の高士、彫刻家、畫師、詞客、文人」と芸術家、文化人一般に呼びかける場合とが主であり、特定の立場の人へのそれは学校教員と地学家(この場合は地質学者の意)に限られ、それぞれ一カ所のみである。このことは、この本が一般の知識層、青年層を対象として書かれているので、当然のことである。とともに学校教員への呼びかけが一カ所のみであることは、学校教育の場への直接的な影響を主たる目的の一つとした本ではないことを示している。さらに、その学校教員への提言が、学生生徒の登山を奨励しその作文を書かせるように、という内容⁷⁾であることは、志賀が『日本風景論』の性格を地理の書であるとはあまり考えていなかったということであろう。彼は芸術家と地学家(一カ所のみであるが長文)に多くを呼びかけ、地理の学校教員を特に名指した箇所はない。

一般の知識層、青年層を対象として書かれたということは、当然のことながら、学校教育に直接影響を与えることが主目的ではなく、それは、世論のリーダー的な立場にある人々に、科学の名を借り、風景にことよせて、日本人の優越感、中国への差別意識を定着させることにあ

ったのである。

2 『日本風景論』が国民教育に与えた影響は何か

大槻(1992)は、志賀を日本地理学の先覚者と讃え、この『日本風景論』を指して、偉大な役目を果たした、と記した。大槻は同じ地理学者として敬意をこめたつもりかも知れないが過大に過ぎる賛辞⁸⁾というべきであろう。

私は、志賀重昂の『日本風景論』はマイナスの面においても、果たした役割は大きく、この本の著者としての志賀は意図的にデマゴグ的あるいはトリックスター的な存在として、日本の思潮を右傾化させ、第二次大戦へと続く流れを導いたものとして、より厳しく批判的に位置付けるべきであると考え⁹⁾。

当時の書評のなかで、わずかに、というか、さすがにというべきか、内村鑑三の文は、この点、つまり《口から吐く炎》を衝いている。内村(1894)は「国粹保存論の提起者志賀氏は純粹の日本人なり」と述べ「目下吾人の讐敵なる支那本土に対する彼の敵愾心の如何に激烈なるよ」と彼すなわち志賀の記述を紹介し、さらに「日本は美なり、園芸的に美なり、公園的に美なり、然れど吾人をして他洲に譲る所あらしめよ」と世界には他にも偉大な美のあることを述べて志賀を批判している。しかし、このような客観的で冷静な批評は、当時の日本では受け入れられないことをも意識して、内村はこう結んでいる。「愛国心上騰の今日に方(おい)て此非国家的の言を発す批評家の任亦難かな」

これまで『日本風景論』の著者としての志賀重昂について論じられてきた諸論の主なる視点は、大別すれば次の三つのいずれかに向けられたものであった。

- ①登山の鼓吹者としての志賀重昂
- ②地理学者としての志賀重昂
- ③国粹主義者としての志賀重昂

しかし少なくとも、『日本風景論』に関する限り、著者志賀重昂は地理学者としては科学的でも実証的でもなく、登山の鼓吹者としては本人はほとんど登山経験をもたない、単なるアジテーターで、結局、①や②と位置づけるには、躊躇せざるを得ない。

その反面、国粹主義者としては、見事に日本の風景美を世界に冠たるものと称揚し、日本の地学者による日本の国土研究の成果を印象づけ、さらに帝国主義的な大陸侵略への流れの一つを生み出すこととなったのである。

例えば火山の景観についても、志賀は火山一般については関心もあまり高くなく、知識も貧弱であったが、日本の国粹を具象するものとみなした富士山の形態の美しさと、殉国の士ともいべき犠牲者をだした吾妻山の噴火には、強い関心を示している。他方、当時、社会的に大きな衝撃を与えた磐梯山の噴火については、それを取り上げては火山の素晴らしさを讃える趣旨に合わないためか殆ど無視している。

ナショナリズムと志賀重昂の関係については、地理学においても、源(1975)、Minamoto(1984・1989)、千田(1988)、Takeuchi(1988・1989)らが論じているが、これらの論説からは、総じて、時代が志賀重昂の国粹主義的地理観を作り出したか、あるいは時代と志賀重昂が共鳴しあったかのような印象を受ける。しかし、むしろ志賀は国民を教育し、時代を変え、国民を

アジアでの再三の戦いに導いていったといえよう。

特に愛国心の拠り所としたのが富士山であった。江戸時代までは、日本に住む人々にとって富士山は日本一の山ではあるが、駿河と甲斐の両国の境の山でもあった、ということであり、一般の人々に自分は日本国民であるという意識がほとんどない時代であったから、もちろん「国体」の表徴という意識もなかった。日本は国というよりは一つの世界というべきものであり、富士山は駿河・甲斐両国以外の土地の国の人にとっては他国の山であった。もちろん三国一の富士の山ともいったが、それは唐天竺¹⁰にどのような山があるか、などを知った上の比較…などという具体的な話ではなく、三国一の花嫁などという類いの他愛のない褒め言葉であった。

ところが、明治期に近代国家としての日本が形作られてゆく過程で、富士山は日本を代表する山と明確に意識されるようになったが、それとともに世界の地理が広く知られるようになると、少なくとも高度においては富士山が世界に誇れるものではないことがわかったのである。

とすれば、富士山が世界に誇る山となるためには、その美しさがもし科学的に立証されれば、日本人の劣等感を雪ぐものとなり得るのである。その操作を行ったのが志賀の『日本風景論』であった。そのためには、敢えて卑劣な剽窃まで辞さなかったのである。

また、富士山が明治以降の帝都東京、すなわち皇居のある土地から遠望できる山であったということの意味が大きいのではないか、という問題がある。日本が一つの国と意識され、東京がその中心と明確に位置づけられ、東京には現人神天皇が在り、遙かに富士山が仰げることから、「国体」という極めて抽象的な概念を具象するものとして、皇居二重橋の景観とともに富士山の山容が用いられるようになったのであろう。

『日本風景論』は、このような国土認識が、大日本帝国の国民（臣民）教育の一部として位置付けられてゆくための、一つの機縁を与えたもののなのであった。

3 『日本風景論』は地理学にどのような影響をもたらしたか

志賀が1927年に没したとき、当時の地理学界の重鎮であった山崎直方が追悼文を書いている。弔意をこめた文であるから批評的なことは控えてあるが、アカデミックな地理学の立場から『日本風景論』がどう見られていたかがうかがわれる。山崎は地理学に貢献した書として、まず明治初年の内田正雄『輿地誌略』、福沢諭吉『世界國盡』を挙げ、それらに次ぐものとして、小藤の『地文学講義』や矢津の『日本地文学』、さらに志賀の『日本風景論』（および『南洋時事』、『地理学講話』）を挙げている。すなわち五指に入るものなのである。しかし、小藤や矢津の書と比較し「極めて厳格に云へば志賀君の此等の著は前者ほどには科学的でなかった」と書き「又其後の研究も恐らくは純科学的ではなかったかの如く見える」と述べる。

山崎にはもちろん彼の科学的装い（に剽窃が多いことに気づいていたかどうかは分からないが）すなわち《獅子の頭》が底の浅いものであることを看破していたのである。

『日本風景論』に関して「君が本邦風景の由て来る所を開析し、由て著るゝ所を説明するに當り理學者としての筆鋒必ずしもゲイキーの蘇国風景論の如くに微に入り細を穿つ底のもではなかったが」と批判的に書き、しかし当時の一般読書人には、それまでほとんど無かった「地文学的知識と趣味とを扶植するに於て十二分の効果があった」としている。つまり一般の読者には《獅子の頭》は効果があったのである。

山崎は「君の学界に於ける偉大なる功績は實に地理學の民衆化であり国民化であった」と述べた。また「興味化」とも書き「国民の精神鼓舞に努められた」とも記している。この国民化

を山崎が民衆化と併記して、別の意味をもたせていることは、国粹主義者志賀の足跡を山崎がどうとらえていたかを示している。キマイラの《口から吐く炎》の一端に触れているのである。

『日本風景論』が地理の書を意図したものとは思えないものではあるが、それにもかかわらず、この書は地理書であるとも考えられて、刊行当時から後年に至るまで、多くの論議がある。それらを通じて地理学・地理教育にどのような影響を与えたか、または与えていなかったかを考えてみよう。

渡部(1971)は「饒舌で俗っぽい景観地理学の教科書としかとれない」と『日本風景論』をとらえ、しかも続けて「『日本風景論』は地理学者を喜ばせる類いの書ではなかったようである」と当時の小川琢治の書評を紹介し、読者層である青年たちが共鳴したのはその美文に対してではなく、その国粹主義にあったことを指摘し、この書の目的は国粹主義の鼓吹にあり、「明らかに地理学の知識を普及させる目的をもっていたのではなかった」という主張をしている。

私は、この渡部の主張にほぼ同感であるが、むしろ、「自然地理学の知識を普及させる目的をもつかのように装いながら、実はこの書の目的は国粹主義の鼓吹にあった。」と理解している。

前述の書評における内村の指摘と警告は、ほとんど無視された。その結果、志賀の『日本風景論』は、日本の地理教育に、自然地理学的な正確さや論理性を求めるよりも、自然を通じて国粹主義を鼓吹することに力点が置かれるような地理教育を是とする、その流れへの道筋を作ってしまった、といえよう。

そして、『日本風景論』は国体の具体的認識法を示すことにより、その後、1945年の敗戦に至るまでの半世紀にわたる国民(臣民)教育の理念の基礎を与え、国と国民を誤らせる役割の一端を担ったといえよう。

阿部(1992)は、可視的な富士山に「国体」の正統性を見いだすという思考様式が、近代日本の教科書にみられることを論じ、それは志賀の『日本風景論』にもみられるとした。筆者は、むしろ、志賀の『日本風景論』が、近代日本の「国体」の正統性を可視的な富士山に付与する役目を担い、以後の教科書をその傾向へと導いたと考える。その根拠となったものが Milne(1886)論文であることを、故意に伏せた操作、すなわち剽窃行為(米地 1990)は、かくして見事な効果をあげたのである。

直接的には、『日本風景論』は地理学に与えた影響は小さかったが、間接的には、やはり大きかったと考えられる。すなわち、幕末期ないしは明治前期の地理教育のめざしたものは、世界の客観的認識と、それに伴う日本についての相対的位置づけの理解にあったが、『日本風景論』を端緒として日本国とその国土の主観的認識、絶対的な意味づけが行われるようになったといえる。それは結局、第二次大戦までの日本の地理教育を自己中心的な皇国地理としてしまう、その流れの淵源となったのが『日本風景論』であり、特に富士山の記述なのであった。(この富士山の記述に関する詳論は別報で論ずる。)

IV キマイラ『日本風景論』の骨格と景観認識

1 『日本風景論』はどのような骨格を持っていたか

キマイラ『日本風景論』の外見は《獅子の頭》科学的装い、《牡山羊の胴体》古典的詩歌美文の類い、《竜の尾》登山の奨め、そして《山羊の口から吐く炎》国粹主義・反清国の檄、という奇怪なツギハギであった。だが、その正体、内に隠れているものは何であろうか。

その骨格は漢文、漢詩の形で現れる、古風で武張った三河武士のそれである。『日本風景論』初版の挿絵は、全巻、自然景観を描くものとその説明のみとによってよい中に、人工的景観としてただ一葉、岡崎城の絵と説明とが挿入されている。もちろん自然的な説明も付加されているが、それも「花崗岩の細碎して組成せる水成岩の丘陵上」に城跡があるなどという、意味不明のものである。説明の大部分は徳川家康の誕生の地であることをはじめ、歴史ないし伝説である。花崗岩の侵食を語るべき箇所に、無理に関係付けて岡崎城の図を挟んだのは、彼が岡崎藩士の子であることを誇りにしていたからである。

彼の教養の基礎にあったものは武士階級のそれであった漢詩、漢文と儒学である。その教養の本家本元を治める大国清と戦うのは、知的面の師に対する一種の忘恩であり、知的故郷への反逆でもあった。しかし、真の近代国家となるためには必要な過程と志賀は自分を納得させたのであろう。

「君は幼時より學ばれたる漢籍漢詩の素養に加ふるに札幌農学校に於ける純米国式の教育を受け、其の豪宕なる唐安詩人的の文藻とアーヴィングの叙景の中に屢々漂うてゐるやうな情緒とを巧にこきまぜて」云々と前述の山崎（1927）の追悼文にある。

キマイラ『日本風景論』の奇怪な外見の下には、志賀重昂その人が潜んでいるが、その《骨格》は古めかしい三河武士の土魂であり、彼の漢詩、漢文は、その《血》というべきものであった。そして奇怪な《キマイラの頭や皮や尾》を身につけるには、さらに英語力をはじめとする洋学の《肉》をもって内部を埋めなければならなかったのである。

2 『日本風景論』は国をどう見ていたか

志賀は『日本風景論』の中で国をどう捉えていたのであろうか。私は志賀はこの頃、まだ近代的な国家観を完全には持たず、半ば前近代的な考えに立っていたと考える。それは当時の多くの知識人、特に士族に共通のものであったようである。

そのような意識はその後尾を引き、近代国家像と戦国期～江戸時代の大名領国的認識とが混然としていたのである。そして、現代でも日本人の国家意識、国イメージの曖昧さがあることについては江口（1995）が指摘している。

同氏によると日本人にとっての「国（くに）」は、英語の land, country, nation, state の少なくとも四つの表現の示す、違ったものを全部区別しないイメージであるという。この場合、land は自然的国土、country は人々の集団、nation はその政治的統一体、そして state は country や nation に作られる政府、議会等の国家機構をそれぞれ指すという。

猪瀬（1977）は志賀の『日本風景論』のモチーフを「おらがくにがカントリー（地方）でなくネーションであるというナショナルな意識の発生によってもたらされた近代の産物」（下線部は原文では傍点）と述べた。この指摘は極めて重要であるが、猪瀬のいうほど単純ではなく、むしろ次に述べるような、意図的な“すりかえ”であったと考えられる。

志賀は『日本風景論』の書き出しに「『江山洵美是吾郷』と、身世誰れか吾郷の洵美を謂はざる者ある。」といった。これは郷すなわち country の人々が land 江山に寄せる想いを書いている。ところが彼は、nation の重要性を説く nationalist であり、その立場から state に対して発言する論客でかつ政治家 statesman であった。彼は日本という country の人々に、その国土 land の風景 landscape の美を説くが、それが同時に、日本という nation のアジアの国々 nations への優位に置き換わり、日清戦争のような日本の state の国策 national policy、もし

くは state policy への国民（これも nation という）の国民感情 national sentiment や国民精神 national spirit を刺激したのである。

すなわち『日本風景論』のキマイラの性格は、日本人の「国」イメージのキマイラ性に合わせ利用して形成されているともいえよう。日本人の country 的情緒《山羊の胴》を land 国土の科学的解説《獅子の頭》で裏付け、さらに登山の奨励《竜の尾》によって国民の land へのより強い結び付きを薦め、nation としてのアジアへの侵略の檄《口から吐く炎》によって、結局は state のその路線を支持させ、その後の大日本帝国の運命を指し示したのである。

志賀が巧みに日本人の「国」に対する曖昧で包括的、多義的な認識を利用したという一面と、志賀自身が包括的、多義的な認識を持っていたという面の双方が、このような操作を導いたのである。志賀の認識の中では、戦国期から幕藩体制へと続く歴史の中の大名領国のように、領主が領地、領民を治めるシステムの延長上に近代帝国日本があったのである。『日本風景論』執筆の頃には、志賀は対外戦争に勝てば、そのまま占領地が帝国の版図になると信じていたふしがある。（のち日露戦争などにおいて、外交の重要性に気づくのであるが…）

3 『日本風景論』は景観をどう見ていたか

以上のことから『日本風景論』に描かれた景観が、意外に古めかしい江戸時代的なものであるということの背景にあるものが浮かび上がる。すなわち、志賀は三河武士の心情の持ち主で、戦国期の領国とさほど変わらぬ国家像を近代日本に重ね合わせて持っていたということなのである。

さらに志賀は、『日本風景論』執筆時点までに、登山体験は戸隠山などごく僅かであり、旅行の経験すら北海道の若干の地ぐらいで、日本の大半の風景は、彼のまだ知らぬところであった。まして、日本の玄武洞と比較した英国のフィンガル洞窟や、日本の火口湖と比較した中国の洞庭湖や西湖などは実見していないのである。

志賀の景観の捉え方は、古風な風景観と武士の心情との組み合わせから生まれるものであり、それらを近代的な景観の見方に見せかけるため、資料を多用し、生半可な術語を操ったのである。

志賀の景観についての論述は、まず古風な見方でその美を語り、それを科学で説明すれば、こうこう言うことだ、と解釈し、科学は日本にそれが多いことを示している、だから日本は特別だ、というのである。

例えば東山道の春の景観の美しさを

はるはいまかすみそわたる最上川

瀧のこほりもとけやそむらむ

というような古歌で示し、「蓋し山道各地百花の一時に競発するは、冬季中蕾芽の多量の水蒸気に涵養せられ、内心鬱勃、春来温度の激昂に刺激せられ輒ち発奮するによる」といった一見、科学的にみえるが、実は恣意的な解釈を加える。次いで冬から春への気温の変化を表で示す。これが「水蒸気の感化、其の日本の天文、地章を洵美ならしむ現象」の説明の形式である。

志賀は決して科学的な景観の見方を説いているわけではない。単にある現象を見る古風な伝統的風景観を挙げ、その現象について科学的にみえる説明ないし“こじつけ”を行っているに

過ぎない。まして日本が絶対的に景観の美において他国を凌駕するということの説明は次に述べる富士山の記述を除けば、何一つしてない。

ただ一つ、例外的に科学的な景観美の提示をしている箇所は、富士山のプロフィールが対数曲線をなすから美しい、という記述であり、これが日本の美が世界を圧する根拠であるとしている部分である。これについては、私（米地 1990）がすでにミルン論文（Milne 1886）を志賀が剽窃し、成層火山一般についてのミルンの説明を富士山独特のものとして“すりかえ”たものであることを指摘している。

すなわち、志賀は真に新しいまなざしで「景観を見たか」と問われれば、志賀自身は量的には現地で景観を実見した経験に乏しく、質的には古風で伝統的な景観の見方にとどまっていた、つまり志賀は新しい眼、彼自身の眼では、殆ど「景観を見ていなかった」のであると、私は答えざるを得ない。

その志賀自身は見えていなかった分を、彼は外国語の文献の翻訳や、地質図や気象データなどの素人的読解により補ったが、それでも不十分なところは、やはり古めかしい詩歌で埋め、彼独特の迫力ある漢文体の美文で補綴したのである。

4 志賀は景観の保護に関する先覚者か

『日本風景論』の内容の中で、今日においてなお評価に値しうるものがあるとすれば「日本風景の保護」の章であるといえるかも知れない。志賀が「風景の保護」をいったことは、確かにこの時代としては素晴らしい卓見である。ただし、中野目（1993）によれば、志賀が唱える風景保護の発想は、志賀の独創ではなく、田中善助が既に「風景保護の請願」をしたという記事が、1892年に志賀の編集する雑誌『垂細亜』に掲載されているという。

現時点で最も新しい復刻である岩波文庫新版（1995）の近藤の解説は、志賀の文を引用し敷衍して、こう結んでいる。（「彼」とは志賀を指す）

…彼の国土にたいする情熱的な、ここからほとばしる愛情はいまなお生きつづけている。「誰か吾郷の洵美を謂はざらん」という彼はつぎのように訴えている。

「日本の社会は、日本未来の人文を愈々啓発せん為め、益々日本の風景を保護するに力めざるべからず」

風景は人間にとっていかなるものか、それを教えてくれるのである。

しかしながら、志賀のいう「風景の保護」は、果たして「人間にとって」の風景を考えたものであったろうか。実は国家にとって「風景」はいかなるものかを志賀は認識し、日本という国家の未来の発展のために、「風景の保護」を説いたのである。

そのことの証拠は、この「日本風景の保護」の章の中に、台湾占領ののちの版では「臺灣の風景」という部分が書き加えられ、このような優れた風景の地を得たことに発奮せよと、檄をとばしている、という事実が挙げられよう。

おわりに ― 地理学の立場から ―

『日本風景論』は地理書といわれるが、その地理的部分は、殆どがキマイラの《獅子の頭》すなわち借り物で“こけおどし”の素人的似非科学的文章からなる。

したがって、直接的には、『日本風景論』が地理学や地理教育に与えた影響は小さかったが、間接的には、やはり大きかったと考えられる。すなわち、幕末期ないしは明治前期の地理教育のめざしたものは、世界の客観的認識と、それに伴う日本についての相対的位置づけの理解にあったが、『日本風景論』を端緒として日本国とその国土の主観的認識、絶対的な意味づけが行われるようになったといえる。

明治時代に、地理書は二度ベストセラーになった。最初のそれである福沢諭吉の『世界國盡』は、上記の世界の客観的認識と日本の相対的位置づけに資するものであったが、次の志賀の『日本風景論』は、その反動ともいえるべき性格のものであった。

そのような主観的認識に基づく地理教育は、結局、第二次大戦直後に、それまでの日本の教育をとらえた『アメリカ教育使節団報告書』が、「地理は自衛的、否、宗教的と言えるほど、自己中心的であった」と評した（村井訳、1979）ような性格を持つに至ったのである。その淵源となったものの一つが『日本風景論』なのであった。

志賀らの国粹思想は昭和期のそれとは区別すべきという意見はある。例えば富永（1990）は「彼らのとなえたナショナリズムは、当時『国粹主義』の名で呼ばれていたとはいえ、昭和ファシズム期における排外的で狂信的な国粹主義とは明瞭に区別されねばならない」という。たしかに区別すべきではあろうが、しかし少なくとも彼ら（東海散士、陸羯南、三宅雪嶺、志賀重昂、杉浦重剛、池辺三山ら）のうち志賀の考えは昭和ファシズム期の狂信的国粹主義に繋がる側面をもっていただ私は考えている。

日本地理学史の側面、すなわち『日本風景論』を含めて、アカデミックであると啓蒙的であるとを問わず、1945年の敗戦に至るまでの日本の狂信的な国粹主義、侵略主義の流れに地理学者が与した一面を、的確にとらえることは、日本の地理学にとって、避けて通ることのできない重要な課題であろう。

志賀の人と文とは確かにある種の魅力を備え、近代日本人に地理の楽しさ、面白さを教え、世界への眼、自国日本への眼を開かせた。私も彼の全てを否定するつもりはない。しかし、一般に彼の代表作とされる『日本風景論』には光と影との両面があるものの、その影の部分が極めて大きかったという結論に達せざるを得ない。なぜなら『日本風景論』は日本人にアジア大陸への侮りと野心とを焚き付け、それを煽ることによって、アジア諸地域の人々へ炎を吐きかけた怪物キマイラ¹⁾となったことが明らかであるからである。

註

- 1) この怪物については様々に語られており、時には竜ではなく蛇の尾がついていたり、頭は獅子のそれだけだったり、竜か蛇の頭ももつ三頭の怪物とされたりもする。本稿では高津（1953）の訳に従った。
- 2) 地質学については、志賀自身が「私の学生時代」という文の中で、札幌農学校時代には「不

- 幸にして地質学の教師が居なかったが為に、地質を学んだものは一人もない」と書いており(全集 第8巻)、数学については湘川漁夫(1927)と名乗る旧友が、同校時代の志賀について「数学と来たら最も不得手」であり、落第するところを生徒一同の嘆願で助けられたとかいている。
- 3) 志賀の全容について総合的にまとめたものとして昭和女子大学近代文学研究室(1967)の著作があるが、その中の『日本風景論』の章は「重昂の地理学上の業績も意義深い」という文で始まり、この書を地理学書と呼んでいる。一般にはこのように受け取られているのである。
 - 4) 本山(1958)は、この志賀の「国粹旨義」について、1888年の強い主張が、翌年はほとんどみられず、1890年以降完全に姿を消した、と指摘している。本山はその原因を、志賀の思想的・内面的なものや、日本経済の成長など外部の変化に探ろうとした。しかし、筆者は、もっと単純な理由、すなわち西村の論旨の焼き直ししないしは変形では、よの以上の理論的深まりは無理だったのであらうと考える。
 - 5) その5章は、「緒論」「日本の文人、詞客、画師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」「日本風景の保護」「亜細亜大陸地質の研鑽、日本の地学家に寄語す」「雑感 花鳥、風月、山川、湖海の詞画に就て」であり、先の詳細な風景の叙述からなる4章に比較すれば、これらは単なる序論と付録的な提言や資料にすぎない。
 - 6) もし花崗岩も合わせた山岳論としたならば、本論対付録の比は、火山岩：付録(花崗岩+登山術)の6：4というアンバランスな比率とはならず、山岳論(火山岩+花崗岩)：付録(登山術)の5：1となり、自然なものになったはずである。
 - 7) このような志賀の提唱の背景には、彼が長野県中学校の教師時代に生徒の戸隠山登山に付き添った経験があるらしい。(源 1995 による)
 - 8) 大概は、志賀の『日本風景論』によって「国民は日本の景観美を再認識し、関心を植えつけられた」とし、それまでは国民は「…おぼろげながら美観を描いてはいたが、日本国土全体についての知識は、皆目なかった。それを始めて知らされ、興味と驚異の目を輝かせるようになった」と評する。さらに、「わが地理学界につくした功績は大きく、古今稀にみる存在であった。その学説の理論も方法論も、現在においても時代遅れでなく今も生き、地理学研究の参考文献として大いに役立っているのである」と志賀について過大に過ぎる評価をしている。特に、「理論も方法論も」現在に生きているというに至っては論外である。
 - 9) ただし、これは『日本風景論』に限定していつているのであり、志賀重昂の全てを否定しようとするものではない。私は志賀の『南洋時事』や『大役小志』などの一部には高い評価を与えるべき部分もあると考えている。
 - 10) 三国一という意味には唐天竺本朝の三国とする説のほかに、駿河、甲斐、相模の三国とする説もある。かつて東西八代郡は相模に属していたため、富士山は三国に跨がっており、こう称されたという(神原 1924)。
 - 11) 怪物キマイラ(キメラ)を譬えに使った書物に『キメラ—満州国の肖像』(1993)がある。著者山室信一はこの本で満州国をキメラと呼んでいる。このキマイラ満州国を作った歴史の流れの源には、日清戦争以来の、志賀の『日本風景論』にみられるような日本の大陸侵略を正当化するプロパガンダがあったのである。すなわちキマイラ書がキマイラ国を生む端緒の一つとなったのである。

文献

- 阿部一 (1992) : 近代日本の教科書における富士山の象徴性. 地理学評論, 65, 238-249.
- 荒山正彦 (1989) : 明治期における風景の受容-「日本風景論」と山岳会-. 人文地理, 41, 551-564.
- 猪瀬直樹 (1977) : 評伝・志賀重昂と『日本風景論』, 志賀富士男ほか編: 『日本風景論』解題, 鳳出版, 29-118.
- 猪瀬直樹 (1986) : 『ミカドの肖像』, 小学館, 606 p.
- 内村鑑三 (1888) : 批評・志賀重昂氏著「日本風景論」, 六合雑誌, 168, 29-31.
- 江口圭一 (1995) : 『日本の侵略と日本人の戦争観』, 岩波ブックレット, 62 p.
- 大井道夫 (1978) : 『風景への挽歌-私の自然保護論』, アンヴィエル, 321 p.
- 大槻徳治 (1992) : 『志賀重昂と田中啓爾 日本地理学の先達』, 西田書店, 241 p.
- 勝原文夫 (1979) : 『農の美学』, 論創社, 298 p.
- 金子薫園 (1935) : 自然美に託した愛國文学-『日本風景論』の思ひ出-. 文芸春秋, 昭和10年3月号, 32-35.
- 神原信一郎 (1924) : 富士雑纂, 科学知識, 4, 802-805.
- 黒沼健 (1979) : 『登山の黎明』, ベリかん社, 288 p.
- 黒沼健 (1991) : フランシス・ガルトン「旅行術」と「日本風景論」, 日本古書通信, 56(8), 1.
- 小島烏水 (1937) : 解説, 志賀重昂『日本風景論』, 岩波文庫, 3-17.
- 近藤信行 (1995) : 解説, 志賀重昂『日本風景論』, 岩波文庫 (新版), 383-395.
- 志賀重昂 (1888) : 「日本人」の懷包する処の旨義を告白す, 日本人, 2, 3-6.
- 志賀重昂 (1894) : 『日本風景論』初版, 政教社, 220 p. (復刻版 日本の山岳名著 1975, 大修館書店)
- ほかに次の各版を参照した.
- (1895) : 第5版, 政教社, 234 p.
- (1903) : 第15版, 博文館, 234 p.
- (1928) : 志賀重昂全集第4巻所収, 同刊行会, 1-194.
- (1937) : 岩波文庫版, 308 p.
- (1976) : 講談社学術文庫版, 上197 p. 下188 p.
- (1980) : 政教社文学集, 明治文学全集第37巻所収, 筑摩書房, 3-97.
- (1995) : 岩波文庫新版, 395 p.
- 志賀重昂 (1928) : 『南洋時事』, 志賀重昂全集第3巻所収, 同刊行会, 1-112.
- 湘川漁夫 (1927) : 志賀重昂氏の事ども, 科学知識, 7, 577.
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1967) : 志賀重昂, 近代文学研究叢書, 26巻, 昭和女子大学, 143-213.
- 千田稔 (1988) : 「風景」のナショナリズム-志賀重昂と正岡子規-奈良女子大学地理学研究報告, III, 12, 7-144.
- 千田稔 (1992) : 『風景の構図 地理的素描』, 地人書房, 282 p.
- 大俗窟主 (1895) : 読日本風景論, 精神, 50, 29-32.
- 高津春繁訳 (1953) : 『アポロドーロス ギリシア神話』, 岩波文庫, 229 p.
- Takeuchi, K. (1988) : Landscape, Language and Nationalism in Meiji Japan, Hitotsubashi

- Jour, Soc. Studies. 20. 35-40.
- Takeuchi, K. (1989): Nationalism and Geography in Modern Japan: With Special Attention to the Period between the 1880s-1920s. Nozawa, H, ed. : Indigenous and Foreign Influences in the Development of Japanese Geographical Thought. Kyushu Univ. Fukuoka. 57-62.
- 田口二郎 (1995): 『東西登山史考』. 岩波書店. 247 p.
- 富永健一 (1990): 『日本の近代化と社会変動』. 講談社学術文庫. 477 p.
- 中野目徹 (1993): 『政教社の研究』. 思文閣出版. 319 p
- 野口武彦 (1994): 志賀重昂『日本風景論』. 伊東光晴ほか編: 『近代日本の百冊を選ぶ』. 講談社. 138-139.
- 西村貞 (1888): 「日本人」ニ質ス. 日本人. 2. 7-8.
- 前田愛 (1973): 志賀重昂と日露戦争. 伝統と現代. 20.
- 前田愛 (1978): 『幻景の明治』. 朝日新聞社. 253 p.
- 松田道雄 (1962): 志賀重昂「日本風景論」. 桑原武夫編: 『日本の名著-近代の思想』. 中公新書. 41-46.
- 三田博雄 (1973): 『山の思想史』. 岩波新書. 236 p.
- 源昌久 (1975): 志賀重昂の地理学-書誌学的調査-. Library and Information Science. 13. 183-204.
- 源昌久 (1995): (書評) 戸田博子: 志賀重昂-回想と資料 生誕百三十年記念誌-. 地理学評論. 68. 827-828.
- Minamoto, S. (1985): Shigetaka Shiga 1863-1927. Geographers: Biobibliographical Studies. 8. 95-105.
- Minamoto, S. (1989): The Beginnings of Modern Geography in Japan: From the Mid-Nineteenth Century to the 1910s. Nozawa, H, ed. : Indigenous and Foreign Influences in the Development of Japanese Geographical Thought. Kyushu Univ. 49-55.
- Milne, J. (1886): The volcanoes of Japan. Trans. Seismol. Soc. Japan 10. 1-184.
- 村井実 (1979): 『アメリカ教育使節団報告書』. 講談社学術文庫. 155 p.
- 本山幸彦 (1958): 明治二〇年代の政論に現れたナショナリズム-陸羯南・三宅雪嶺・志賀重昂の場合-. 坂田吉雄編『明治前半のナショナリズム』未来社. 37-84.
- 矢津昌永 (1889): 『日本地文学』. 丸善. 475 p.
- 山崎直方 (1927): 志賀重昂君を弔す. 志賀重昂全集 9. (1929) 所収. 225-227. 同全集刊行会.
- 山室信一 (1993): 『キメラ-満州国の肖像』. 中公新書. 330 p.
- 矢守一彦 (1987): 志賀重昂-「日本風景論」を中心に-. 『大阪大学放送講座「日本研究の先達」』. 一心社. 151-165.
- 米地文夫 (1989): J. ミルンの地理学, 特に地形学における史的意義-志賀重昂とのかかわりを中心に-. 日本地理学会予稿集. 35. 284-285.
- 米地文夫 (1990): 志賀重昂『日本風景論』の分析-火山に関する剽窃と国粹主義の関係-. 日本地理学会予稿集. 38. 46-47.
- 米地文夫 (1996): 山の名に地政学はなじまない-「日本風景論」から「大地の子」まで-. 季刊地理学. 48. 188-191.
- 渡部武 (1971): 日本風景論の系譜. 伝統と現代. 4. 72-81.